

私のオートバイ彼女の山

私はバイク乗りである。いや、今はバイク乗りだったと言った方が正確だろう。考えてみれば、根っからの釣り師である私が行動範囲を広げるためには、当時二輪にまたがる事は必然だったのかもしれない。

大藪晴彦著『汚れた英雄』の主人公、北野昌夫を崇拜し、片岡義男著の『ボビーをつかまえる(首っただけ)』の主人公に自分を重ね、彼が乗るヤマハRD400が私の愛車であった。

1999年ノストラダムスの予言は十中八九当たるだろうと信じていたので、きつと私はボビーや昌夫が短命であったように自分も壮絶な人生を歩むに違いない。そうであろうから硬派を気取って、浜田省吾の『オンザロード』を口ずさみながら独りバイクにまたがり放浪のオートバイ釣り人生を続けていた。

ある時は北海道でラベンダーとカストロールの匂いに包まれながら。ある時は大垂水峠や奥多摩有料道路で、ステップから火花を散らしながら。そしてまたある時は、本栖湖へ続く凍った路面をニグリップでしのぎながら。コーナーの先にある何かに男のロマンを感じたかった。それはまだ見ぬ大物を追うような感覚だ。

私のオートバイ遍歴は、ロードの数だけ、あるいは魚に恋した数だけ乗り継いできた。免許を取った最初の年は、乗ったバイクは2台。青春の香りは

いつでも2サイクルオイルの匂いに包まれている。

16歳の誕生日には学校をサボって原付免許取得。免許交付日もズル休みをして免許を受け取り、その足で上野のバイク街へ行き、スズキのハスラーを月賦で契約。その書類を持ち帰ると親に殴られたが、強引に判を捺させ購入。一ヶ月後には救急車に運ばれる事故までひき起こしても、バイクを得てからは釣りの行動範囲は広がるばかり。バイクと過ごした初めての夏は、気がつけばホンダのMB・5と北海道の大地を踏んでいた。

当時のバイクは原付なのに速度80キロ以上も出るロードレーサータイプ。青森まで国道4号線をひた走り約19時間の旅。東日本カーフェリーに乗り変え、朝には函館の港へ着くという強行軍で東京から一日で着く。あこがれの大地はあつけない着いてしまったが、当時は相応の腕もなく思っていた以上に釣れず、小さなヤマメと大きなウグイに遊んでもらうのが精一杯。イレグイの地なんてのは、妄想だったということに気づく。

3日目の朝。私はニセコの駅で重いフレームザックを降ろし、駅にある水道の蛇口をひねり顔を洗っていた。すると、後ろから突然声を掛けられた。

「これから登山へ行かれるの?」

振り返ると一人の女性がにこやかな笑顔で立っていた。年の頃にして私よりも少し上に感じさせる薄化粧。髪はショートカットで華奢な感じだ。声も女性らしい高い声で上品だ。

確かに私のお出で立ちは、バイクがなければフレームザックにシユラフと一人用テント、どう見ても

登山である。硬派気取りである私は、よせば良いのにトゲのある口調で言い返す。

「いや、違う。」と。

そんな無愛想な態度を嫌って彼女はその場を去るだろう思っていると、彼女は缶コーヒを二つ買ってきて戻ってきた。

「良かったら飲んで。」と、私へ向かってその一本を放り投げてきた。まだ水を拭えていない濡れた手でキャッチすると水滴が手からはとばしり太陽に輝いている。

その光景を一步引いた位置でカメラが捕らえていたとしたら、コマ送りで見える青春ドラマのワンシーンだろう。硬派だと思っていた自分が一瞬にして彼女に心を奪われてしまう。それは、今の私で言えば突然目の前に現れた尺ヤマメのよう。

名前も知らない、わずか数分の二期一会。話もそこそこに彼女は登山バスへ乗り込み、窓越しに笑顔で私に手を振る。煙を吐きながら遠ざかっていく路線バスを、私は缶コーヒを握りしめながら一人いつまでも見送った。

今では一人旅は少なくなったものの、そんなときめきを魚に求めて溪流へ入るのである。